

講義名	財務戦略論 B					授業形態	
担当教員	小笠原 宏	開講期・曜日・時限	後期 月曜日 2 時限				
		単位数	2	履修開始年次	2 年生	ナンバリング・コード	

主題と概要
企業経営における財務管理の重要性を理解し、その基礎理論の理解と習得をめざす。財務戦略構築上、考察すべき重要な2つの側面は、資本の調達と運用である。その両面でバランスのとれた効率的なマネジメントが重要である。与えられた情報を最大限に利用し、定量的な客観性と論理的整合性を重視した財務アプローチをもって複数投資案件の取捨選択や、資金調達を考えた総合的な財務戦略の立案、遂行を行い、同時にその結果を合理的に評価分析する手法を学ぶ。そして実践力の向上までも目指す。本講座で取り上げるアプローチは財務に限らず経営全般に広く応用が可能である。講義内容は、財務戦略論「A」で取り上げた、各論の基本部分をどう組み合わせて応用実践していくかという重点を特に重視して講義を行う予定。「A」「B」を合わせて本園経営大学院の必修科目の内容をベースに、受講対象を学部生向けに集約・調整した内容になると考えている。財務理論の実践的应用として事業経営全般における「戦略」の発想部分を特に重視したいし。
到達目標
基本的な経営管理能力のうち、戦略構築能力、分析能力の醸成。企業価値、プロジェクト価値など算定ができるようになる。財務および経営管理分野の知識の習得をめざし、多様な角度からのものごとを分析して実践的考察ができるようになる。企業の財政状態、経営成績、キャッシュフロー等に関する情報を元に、戦略構築を基盤としたプロフォルマ（予想財務諸表）の作成ができるようになる。同名科目（月5限、火4限）なので、講義内容、進め方は、基本的に同じ（重複）である。

提出課題
各自の理解度や、さらなる高度かつ応用としての経営管理の学習の展開性を把握するような小課題を毎回出す予定。

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバックの方法
毎回の講義前後での、メールによる、質問など、各自のコメントなどを積極的に行ってほしい。加点項目として参照したい。（従来の対面参集講義での質問票（出席票裏面）に相当する）。ブログなどを通して質問も対応していく。有益な質問やコメントは、補足的な解説などはブログで発信したりもする予定。

評価の基準
基本的に15回講義のうち、小課題として受講者に毎回（授業内容要約報告）を推奨する。それがレポート試験などの一部となる。基本前回出席（聴講）の求められる。ネット回線の都合などから、何らかの補充措置があれば対応を考える。小課題の達成評価次第では、何らかの期末試験相当の仕掛けを行うかもしれない。基本的に、満点からの減点方式でなく、加点方式を原則としている。様々な形での積極的な参加が高評価に繋がることを認識して欲しい。コロナ蔓延状況下静化でも、教員自身の高齢化、病歴などから危険性はかわらないし、それは受講生にとっても同様の人がいることを考えて、対面集合授業基本ながらオンデマンド教材などの充実も図りたい。集合形式での試験にしても、場合によってはレポートに切り替える。最終試験（非-1）60％程度、通常毎回授業報告などの課題40％を基本とする。

履修にあたっての注意・助言他
基本的に講義形式。取り上げる主要項目は別項のようなものと考えており、履修者のレベル、理解度に応じ調整する。財務的な定量分析アプローチで現実問題どう議論していくかという説明をめざしている。通り一遍のテキスト的な講義でなく、その時点でのホッタイシューにも普及しながら、実践的応用の視点からの考察を加えたい。経営財務に関する初学者向け基礎文献を自費で印刷頒布することを推奨。本に書いてあることを改めて繰り返し説明するような授業ではない。無理な対面集合授業や集合形式での試験を断行するつもりはない。zoomによる全部白板投影授業形式（既に昨年度から実施）を防疫予防のために、行う予定。ビデオ録画ファイルも積極的に開示するので、履修形態にかかわらず復習に活用を推奨。

教科書					
・特に指定しない。・					
参考図書					

その他
●「証券化の基本と仕組みがよくわかる本」小笠原 宏著（秀和システム2004）●「ビジネス・ゼミナール経営財務入門」井出正介・高橋文部著（日本経済新聞社2004）●「コーポレートファイナンス」〔第10版〕ペリ・ト・R・ブリーリー・S・マイヤース著 藤井真理子・関根新樹監訳（日経BP社2014）●「基礎からのコーポレートファイナンス」〔第2版〕古川浩一他著（中央経済社2003）●「すらすら読めて奥までわかるコーポレートファイナンス」内田文雄・著（創成社2004）●「基礎からのコーポレートファイナンス」〔第2版〕古川浩一他著（中央経済社2002）●「DCF企業分析と価値評価」〔第2版〕土井秀生著（東洋経済新報社2003）など。 ●プリント資料などは、随意作成し、ブログに掲載及び必要に応じて配布予定。

授業計画
1-3 財務諸表の見方と使い方。運転資本の管理。CFMとVBM（FCF計算法など） 新引現在価値法の概念 4-5 資本予算問題(CAPITAL BUDGETING) （財務戦略論「A」で主に扱った、企業財務理論の各論のまとめに相当） 6-8 資本コストの概念（加重平均資本コストの算定）・配当割引法による株価決定理論 9-11 資産選択理論として平均分散法（E-F CAPM、市場β）等。 12-15最適資本構成など資本調達戦略の考え方。WACCの戦略的意義 ●特定トピックと併せて、戦略的经营思考法を解説する。時務様タイムリーな話題をその都度取り上げていく。双方向での授業内外での受講者とのやり取りも活用して内容は調整を予定。

授業形態（アクティブ・ラーニング）		
○	A：PBL（課題解決型学習）	I：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
	U：ディスカッション、ディベート	E：グループワーク
	O：プレゼンテーション	K：実習、フィールドワーク
	※：その他（A-L型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合）	

準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間
授業録画ビデオを毎回作成、youtubeで公開（あるいはブログを通じてurlを公開）するので、復習予定時間（講義時間とは別に合計4時間）を、視聴などによる復習およびノート作成、整理に充当すること。自分用の講義ノート（試験実施の場合は持ち込み可）を作成すること。また、講義で配布する配付資料および、指摘する新聞の関連経済記事、企業記事、雑誌記事、参考文献類の自らの購読を行うこと。その過程で生じた疑問や、独自の見解などがあれば、積極的にメール（アドレスは講義で指示）などで問い合わせや提供をすること。それは他の受講生にも大いに参考になる。それが積極的な講義参加の一つの仕方である。

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連
経営者、マネージャー等チーム、組織のリーダーとしてのものの見方、判断のための手法を学び身につける。当事者意識及びその視点からの経営理論および分析手法、戦略立案を実践できるようになる。評論家的な見方、考え方にとどまらない、実践において役立つ思考プロセスが身につく。

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述
ネット上のストレージ（格納）スペースの活用、ブログによる授業内容、ログの発信（復習のため）を実施。毎回出席票の回収集計により、裏面を意見交換の場として活用。音声ログ、板書ログを公開することにより、ノート取りに費やす時間を解消し、その分毎回講義に集中することが求められる。

実務経験の有無及び活用
外国銀行及びシンクタンク勤務経験があり、実業界、実務社会での要請や必要要件の理解認識を持っている。ほんとうの「実学」、教育訓練の実践を目指している。

備考